

秋 山 虔 著

源 氏 物 語

岩 波 新 書

秋山 虔

1924年岡山県に生まれる

1947年東京大学文学部国文学科卒業

専攻—日本古代文学

現在—東京大学文学部助教授

著書—「紫式部日記」(共著・日本古典文学大系)「源氏物語の世界」
「紫式部日記」(共著・岩波文庫)「王朝女流文学の形成」

源氏物語

岩波新書(青版) 667

1968年1月20日 第1刷発行 ©



著 者 あき やま けん
秋 山 虔

東京都千代田区神田一ツ橋2—3

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都板橋区板橋4—47—7

印 刷 者 白 井 知 一

発 行 所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
神田一ツ橋2—3 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

三陽社印刷・桂川製本

序

万葉集は我國^{わがくに}の大切な歌集で、誰でも読んで好いものとおもうが、何せよ歌の数が四千五百有余もあり、一々注釈書に當つてそれを読破しようというのは並大抵のことではない。そこで選集を作つて歌に親しむということも一つの方法だから本書はその方法を採用した。選ぶ態度は大体すぐれた歌を巻毎に拾うこととし、数は先ず全体の一割ぐらいの見込で、長歌は罷^やめて短歌だけにしたから、万葉の短歌が四千二百足らずあるとして大体一割ぐらい選んだことになるうか。

本書はそのような標準にしたが、これは国民全般が万葉集の短歌として是非知つて居らねばならぬものを出来るだけ選んだためであつて、万人向きという意図はおのずから其^そ処^こに実行せられてゐるわけである。ゆゑに専門家的に漸^{ようや}く標準を高めて行き、読者諸氏は本書から自由に三百首選二百首選一百首選^{なひし}乃至五十首選をも作ることが出来る。それだけの余裕を私は本書のなかに保留して置いた。

そうして選んだ歌に簡単な評釈を加えたが、本書の目的は秀歌の選出にあり、歌が主で注釈が従、評釈は読者諸氏の参考、鑑賞の助手の役目に過ぎないものであって、而して今は専門学者の高級にして精到な注釈書が幾つも出来ているから、私の評釈の不備な点は其等から自由に補充することが出来る。

右のごとく歌そのものが主眼、評釈はその従属ということにして、一首一首が大切なものだから飽くまで一首一首に執着して、若し大体の意味が呑込めたら、しばらく私の評釈の文から離れ歌自身について反復熟読せられよ。読者諸氏は本書を初から順序立てて読まれても好し、行き当たりばったりという工合に頁を繰って出た歌だけを読まれても好し、忙しい諸氏は労働のあいま田畔汽車中電車中食後散策後架上就眠前等々に於て、一、二首或は二、三首乃至十首ぐらいずつ読まれることもまた可能である。要は繰返して読み一首一首を大切に取扱って、早読して以て軽々しく取扱われないことを望むのである。

本書では一首一首に執着するから、いわゆる万葉の精神、万葉の日本的なもの、万葉の国民性などいうことは論じていない。これに反して一助詞がどう一動詞がどう第三句が奈何結句が奈何というようなことを繰返している。読者諸氏は此等の言に対してしばらく耐忍せられんことをのぞむ。万葉集の傑作といい秀歌と称するものも、地を洗って見れば決して魔法のごとく不可思議なものでなく、素直で当り前な作歌の常道を踏んでいるのに他ならぬという、その最

も積極的な例を示すためにいきおいそういう細かしきことになったのである。

本書で試みた一首一首の短評中には、先師ほか諸学者の結論が融^{とけ}込んでいること無論であるが、つまりは私の一家見ということになるであらう。そうして万人向きな、誰^{たれ}にも分かる「万葉集入門」を意図したのであったのだけれども、いよいよとなれば仮借しない態度を折に触れつつ示した筈^{はず}である。昭和十三年八月二十九日斎藤茂吉。

目次

I	光源氏像の誕生……………	1
II	いわゆる成立論をめぐって……………	15
III	宿世のうらおもて……………	29
IV	権勢家光源氏とその周囲……………	51
V	別伝の卷々の世界……………	73
VI	紫式部と源氏物語……………	95

VII	「若菜」卷の世界と方法	115
VIII	光源氏の世界の終焉	147
IX	結婚拒否の倫理	169
X	死と救済	193
	年立	219
	後記	225

I
光源氏像の誕生



源氏物語繪卷柏木(三)部分

源氏物語繪卷の現存する諸段のなかで、光源氏の形姿を前面から描いた唯一の場面である。光源氏五十一歳。かれは世に超絶した榮華をわがものとしたけれども、同時にまた余人の測り知ることができぬ深い苦惱を荷いもつ人でもあった。四十歳の年に妻として迎えた朱雀院の女三宮は、かれと繁上との多年のきずなに危機をもたらし、のみならず、やがて女三宮は柏木と通じて、男子薫を生んだ。この画面は、その薫の誕生五十日の祝いの日、光源氏が頭を垂れ沈痛な思いで、わが子ならぬわが子を抱き、眺め入るところ。かれは、若い日の藤壺との過ちの現世における応報をかみしめるのである。▼章参照。

源氏物語の主人公は光源氏ひかるげんじである。かれは帝きりつばのみかど（桐壺帝、桐壺院きりつばのいん、この呼び名は読者の名づけたものである。以下そうした場合が多い）と、ある更衣きりつばのこうい（桐壺更衣）との間に生まれた、光りかがやく美貌の皇子であった。その容姿の美しさばかりではない。かれはかぎりなくやさしくひろい情愛、学芸技能の何ごとにもずばぬけて秀でた資性のもちぬしとして、この世に生まれてきたのである。源氏物語の作者は、このような主人公を読者に紹介するに当って、少なからず気がさしたのであるうか、かれの美質をひとつひとつあげてゆくとあまりにもものしくてやりきれなくなってしまうとまで言っている。

が、考えてみると、源氏物語ばかりでなく、むかしの物語の、どの主人公たちも、多かれ少なかれ、それが約束事であるかのように、普通人よりぬきんでた理想化をこうむっている。男性でいえば、宇津保物語の清原俊蔭きよはらのとしかげやその孫の仲忠なかつちかあるいは源みなもとのすけし、涼、落窪物語の左近少将さこんのしょうしょうというような人物も思いおこされよう。何も光源氏とて例外ではないのではないか、という考えもしりぞけることはできない。が、にもかかわらず光源氏は、他の物語の主人公たちとは桁ちがいに完満である。光源氏はむかしの物語の主人公たちが伝統的に荷いもっていた、くさぐさの理想性を集合し、拡大的に再生産したことになるだろうか。しかし大切なことは、源氏物語の文脈そのものが、これから述べるように、こうした卓越した主人公を必然的に要求している

のであった。

いづれの御時おほんときにか、女御更衣にようじあまたさぶらひ給ひける中に、いとやむごとなき際きはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。

いうまでもなく、源氏物語の初巻「桐壺」の冒頭文である。どの帝の御代であったか、おおぜいの女御・更衣らのなかに、さほど身分も重からぬかたで、しかも目だって帝のおぼえめたい人がいた。この状況設定はきわめて問題的である。物語の叙述は、以下こう続いてゆく。……最初からわれこそはと氣負うて入内してきた、高貴の家の出の女御たちは、この桐壺更衣を、身の程知らぬ不埒な女として、おとしめそねみにくんだ。彼女と同輩の、あるいは地位ひくい更衣たちも、なおさら出しぬかれた思いに胸がおさまらぬ。こうして朝夕の宮仕えにつけ、人の氣ばかりやきもきさせ、恨みを受けることの積りにつもったせいであろうか、更衣はいたく病弱の身となり、どこかさびしく頼りなさそうにして、里下りがしきるのを、帝はますますふびんにおぼしめされて……、と、読みすすめてくると、私どもは、帝によってこよなく愛された桐壺更衣の、そのためにかえって苛酷な不幸に追いこまれていかなければならぬ状況が、きわめて明確に設定されていることを知るのである。

源氏物語のかかれた藤原時代の一般をいえば、女御・更衣の身分地位は、その出自である家の社会的地位によって決定づけられていた。源氏物語の世界でも、女御は大臣・親王家のむすめであり、更衣は大納言以下のむすめである。后は女御のなかからえらばれるのであった。すなわち、出自とする家の勢力がそのまま後宮における序列——帝とのつながりの厚薄を規定するものであるといえよう。

ところが、いま「桐壺」巻の語るところによると、すでに亡き大納言のむすめで、後見としては無力な母ひとりの更衣が、その美貌とすぐれた人がらのゆえに、とびぬけて帝に愛せられている。このような人間関係の設定は、この時代の通念からすればいたく現実性にそむくものである。作者は、人間の愛情の問題が、権勢支配の前で、身分秩序の前で、いかにもかんたんにおしころされてしまう、いかえれば愛情よりも結婚政策の先行する世の慣行に対して、純粹に人情の立場から反逆していると解してよいのであろう。しかしながら、この抵抗はもろくはかないのである。それが強ければ強いほどに、切実であれば切実であるほどに、苛烈な処罰を受けなければならないことわりである。宮中生活に堪えられず、しばしば里がちの更衣に、帝の哀憐執着は人目をはばかりず増加する。更衣の立場はいよいよ苦境に追いこまれるが、このような悪循環を、より前進せしめるものとして、ふたりの愛情のみのである光源氏は誕生してきたのであった。

そのころ、帝は、右大臣のむすめでもっとも早く入内し、後宮を威圧していた弘徽殿女御の腹に、第一皇子をもうけていた。いうまでもなく東宮となるべき皇子であるが、桐壺更衣腹の新皇子の玉のごとき気品には比肩すべくもない。帝の愛はこの新皇子に集中するとともに、母更衣への異常な愛もいやまさることになる。このような事態を、作者は更衣の窮死によって決着づけるほかなかったのである。と同時に、更衣を死にまで追いこんだ世のおきてのきびしさに、光源氏をも直面させたことになる。

思うに桐壺更衣の死を語る問題的な場面に息をのまない読者はないだろう。神宝を奉安する宮中では清浄が守られねばならないから、死穢は避けなければならない。更衣は帝にみとられて死ぬことはできないのである。禁忌に縛縛されながらも、帝は重病の更衣を手ばなすことができず、ために衰弱の一途をたどる更衣が、かろうじて里邸に下がるや、時をおかず息をひきとるといふ、緊迫したこの場面には、物語のかかれた時代の宮廷の疑うべからざるおきてと人情とのほげしい相剋のすがたがみごとにとらえられ、見すえられているといえよう。

さて、そのような帝と桐壺更衣の悲劇に、その存在のふかくかわりあう皇子光源氏が、前記のように最大級の美質をにないもって生い育ってくることの意義は大きい。かれは物語の主人公の約束事に従って秀抜なのではなかった。いまは母を失い、いかなる後見もなく孤立無援、ただ帝の愛のみが拠りどころではあるが、かかる皇子が、母を死なしめた世のおきてのなかで

生きてゆくには、愛情や美をもとめあてがれる人情を無限に誘発し、これによって絶対的に支持されるに値する能力が必要であったのだ。武骨一辺の武士でも、仇敵であつても、光源氏を見ては、かならず心やわらぎほほ笑まずにはいられまい。弘徽殿女御たりとも、帝のお供で立ちあらわれるこの皇子を、とうていとうんじきすることはできなかったと語られている。

このように、光源氏の不足ない資性は、いわばその生存の根本的な不安を前提として惜しげもなく与えられたものである。かれは物語の世界に敷設された宮廷社会の現実と、深くあいわたる人間として真実性をはらんでいるといえよう。またそうであるだけに、第一皇子にとつてつねに脅威的存在であることをまぬかれないのである。帝は、かれへの愛をおさえ、東宮に立てることも断念したけれども、おおうべくもない天資であるだけに、皇子の将来について深く配慮をめぐらさなければならなかった。

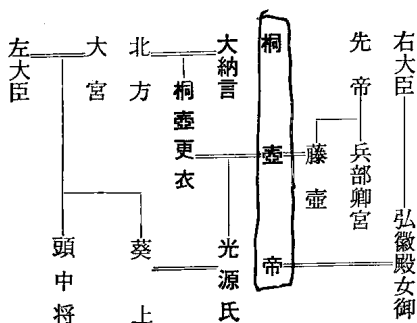
光源氏が東宮にならなかつたばかりでなく、親王宣下もなく臣籍に降下、源姓をたまわることになったのは、それがかれの将来の安定に最良の道であらうという帝の深慮による。すなわち庇護者としては帝ひとりの光源氏であるだけに、もし帝の治世を見送つて後はどうなるのであらうか、外戚なく無品の親王として見すてられないであらうか。また親王として皇位継承の可能性を留保しておくことは、かれがずばぬけた人物であるだけに警戒され、かえつて危険でもあるだらう。ここに物語の主人公は皇族から離脱し、賜姓源氏として出発することになった

のである。七歳の年であつた。

ところで、光源氏が賜姓源氏として生きていくことになったということ、そのことがまたかれの理想化をおしすすめる強固な支盤を獲得しようとしたことをも意味するのであつた。いたい源氏物語は、この時代の他の物語のように、その内容が漠然と架空の過去に属することとして語られているのではなかつた。古注釈以来強く指摘されてきたように、作者は明確に聖代とうたわれた延喜時代、つまり醍醐天皇の治世(八九七—九三〇年)になぞらえて話を運んでいる。したがつて、光源氏も、醍醐天皇の皇子でありながら臣籍に下り源姓を賜わり、後に右大臣になった源高明のごとき人物の事蹟を摸しているといえそうである。誰の心にも印象ふかくきざみこまれている史上実在の人物をふまえる、それが、物語の世界に實在感を与える一つの有効な方法だったのである。後に説くように光源氏が須磨や明石へと流浪する運命にあわねばならぬのも、史実として源高明が反逆の罪を被せられ配流された事件を何ほどかふまえた筋書であつたといえよう。

それはそれとして、この賜姓源氏の歴史的意義について触れると、皇族が皇子の身分をはなれて一家を創始するこの制は、嵯峨天皇の時代(八一四年)に始まっているが、それは主として天皇家の財政窮乏に対処する一方策であつた。しかしながらかれらは臣族となつても尊貴な王統であるという家格の意識をいだき、権門藤原氏に対抗する隠然たる勢力をもちつづけた。そ

I 光源氏像の誕生



うであるだけに藤原権力の増大と反比例するかのように圧迫をこうむり、なかに抜きんできた実力者、たとえば源高明のごとき人は、いきおい藤原氏の陰謀によって放逐される運命にもあつたのであつた。この時代の人々は、こうした賜姓源氏のありかたと運命に対して同情を惜しまなかつた。それは強化する藤原独裁体制に対して自然にかもしれないだされる批判的な心情でもあつたのだ。源氏物語の作者が、主人公に賜姓源氏としての出発をえらばせたことは、この主人公を無類の栄華へと向かわせる上での強力な支持を読者からかちとることであつたといえよう。

さて光源氏は、やがて十二歳で元服、清凉殿の東庇でその儀式がおこなわれた。そして加冠大臣かかんのおとどであつた左大臣のひとりむすめ、この年十六歳の葵上あおいのうゑを正妻とすることになる。左大臣家といえば、弘徽殿女御の父の右大臣家と勢力のあい伯仲する豪家である。左大臣の正室、葵上の母は、帝の妹にあたつていた。光源氏が臣下となり、その左大臣家の婿になるということは、弘徽殿・右大臣がたからすれば、依然としてかれがすぐれた敵対者であることにかわりがないのである。

このようにして、光源氏はその人生の始発において、この時